書くことの情熱（passion）／受難
― Paul Auster, *Ghosts* (1986)の幽霊を殺す幽霊、二度死ぬ幽霊 ―

中　谷　ひとみ

1．Ghosts, Ghosts, Everywhere

Paul Auster のニューヨーク三部作の第二作 *Ghosts*(1986)で語られる物語は、語り手によれば30年以上も前の出来事であるという。奇妙な解釈のように思えるかもしれないが、主人公の私立探偵 Blue が「幽霊」によって「幽霊」にされることから物語は始まる。彼は一年以上もそのことに気がつかない。そして最後に、幽霊にされた幽霊ブルーは自分を幽霊にした幽霊 White/Blackを殺す。よって殺される幽霊は二度死ぬことになる。となれば、奇妙でグロテスクな幽霊たちのお伽話（メルヘン）かとも思うのだが、この小説はオースターの他のニューヨーク三部作小説と同様、メタフィクションとして読める。『幽霊たち』には自分の人生の物語を書いていると思われるブラックと、彼を見張るよう依頼されて週に一回報告書をホワイト―実はブラック―に書き送るブルーの二人の書き手が登場し、書くこととはどういうことか、その代償は何かなどが示唆されるからである。

小説家にしろ、詩人にしろ、奴隷制を糾弾する演説者にしろ、この小説には過去の言語表現者が多く登場する。現代でも作品が読まれたり言及されるという意味で彼らは生きており、したがって「幽霊」であると言える。取り憑いて影響を与えているのである。小説の舞台となるニューヨークはブラックによって言及される幽霊で満ちており、彼らの文学的影響力と読者を捉えて放さない魅力を考えれば、そこはいわば幽霊たちのブラックホールであると言えるかもしれない。例えばホワイトからブラックを見張るよう依頼されてブルーが潜むアパートがある Orange Streetで、Walt Whitmanは最初の本を印刷し、Henry Ward Beecher は奴隷制糾弾の演説を行った。(205, 207)探偵のブルーが見張るブラックは机に向かって Henry David Thoreauの *Walden: or Life in the Woods*(1854)を読んでいる。出版社は Black社であるから、ブラックはブラック社の幽霊か何かであろうか。現代人ブラック自身もある意味では幽霊のように時空を越えて動き回っているような気さえする。ソローも友人の Bronson Alcott と共に Brooklyn のホイットマンを訪ねる前に、オレンジ・ストリートの同じ道を歩き、ビーチャーの説教を聴きに Plymouth Churchへ行った。この教会には Abraham Lincoln, Charles Dickens なども訪れている。(207) また、後にブラックの部屋に入った時、ブルーは *Walden, Leaves of Grass* (1855-92), *Twice-Told Tales*(by Hawthorne; 1837; expanded in 1842)とその他数冊の本を見つける。「物書き、特にアメリカ人の作家の暮らしぶりを知るのが趣味だ。」(208) とブルーに語るブラックは、ソローの親友であるホーソーンが大学卒業後母親の家に戻り、12年間自室に閉じこもって小説を書いたエピソードを語り、短編小説 "Wakefield" にも言及する。(208-9) 小説中の文人幽霊には枚挙に遑

がない。

1845年7月4日から47年の9月6日までのウオールデン湖畔での森の生活を通して書かれたソローの『ウォールデン』をブラックが読んでいたのは興味深い。[1] これは具体的な実体としての自然が持つ精神的意義を強調し、自己を完成させていく物語であり、超越主義的である。(木下　他編 321-2 参考)『幽霊たち』からは語るとはどういうことか、語り手としての自己完成がいかに行われるか、事物をありのままに表現する言葉はどういうものかなどに関して何らかの示唆が得られる。自己完成という点では共通点があるのだ。ソローと同時代の超絶主義者「Emersonにとって自然が『精神の陰喩』であり、Whitmanにとって旅の終りに『偉大な僚友』である神が自分を待っていてくれることが、確かで『間違いないこと』だったのにひきかえ、」ソローは実体がわからない「生活」の正体を見きわようとした。身軽になり、一切の観念から自由になってものに直面し、世界の新しい意味を探る散歩者(walker)になろうとしたのである。(大橋　他編 105-7) エマーソンやホィットマンとは異なり、ソローは神や精神という抽象性やロマンティシズムとは縁が薄い。一方、ニューヨーク三部作の登場人物の特徴のひとつは *City of Glass*(1985)のDaniel Quinn のようによく歩き、またアメリカのみならずフランスまでも失踪した友人の手がかりを求めて旅する *The Locked Room* (1986)の語り手主人公のように、よく動き回ることである。三部作における歩くことの重要さを考えれば、自然の中で世界の新しい意味を探るソローの散歩者とは少し異なるにしても、歩くことにはソローや『ウォールデン』と現代作家オースターの両者に共通する何らかの哲学が認められるのではないだろうか。いずれにせよ、『幽霊たち』は『ウォールデン』と同様に自己完成の物語であり、主人公が語り手として成就することに幽霊という概念が巧みに使われているのである。

2．The Invention of the Ghost, by the Ghost, for the Ghost

幽霊はソローたちだけに限らない。自分の人生物語を書いているブラックも幽霊である。彼は変装して近づいたブルーに対して、一般論のように「書くというのは孤独な作業だ。それは生活を覆いつくしてしまう。ある意味で作家には自分の人生がないとも言える。そこにいる時でも、本当はそこにいないんだ。」と語る。すると、ソローのことなど聞かされた後のブルーは「また幽霊ですね。」と答える。(209)書くという行為は生活感覚や生きているという実感がなくなるほど多くの犠牲・代償を書き手に要求する。この書くことの野蛮あるいは暴力に対して、ブラックは自分の実体感、中心、あるいは定点とも言えるものが必要だと考えた。自分という存在を明確にし、具体的に自分が何をしているのかなど、確たる存在の実感と実像が失われないためである。ニューヨーク三部作は今様ニューヨーク「とりかえばや」物語の三部作と言ってよかろうが、『幽霊たち』でもここで「とりかえばや」となる。二元論の所与の世界で執筆しているブラックは、見張る・見張られるの二元論のもとで、ブルーを見張る主体に、自分を見張られる対象に仕立てる。役割を取り替えて、自分を主体ではなく客体にしようとするのだ。こうすれば自分は見張られる対象としての確たる実体を維持しながら書き続ける

ことができ、自分の人生を温存できる。しかも、見張る主体が実は見張られていたという二元論逆転の画策でもある。ブラックは小説の結末近くで彼の意図をブルーに説明する。

> ... I've needed you from the beginning. If it hadn't been for you, I couldn't have done it.... To remind me of what I was supposed to be doing. Every time I looked up, you were there, watching me, following me, always in sight, boring into me with your eyes. You were the whole world to me, Blue, and I turned you into my death. You're the one thing that doesn't change, the one thing that turns everything inside out.
>
> And now there's nothing left. You've written your suicide note, and that's the end of it.
>
> Exactly....
>
> I know that [I am a fool, a goddamned, miserable fool]. But no more than anyone else. Are you going to sit there and tell me that you're smarter than I am? At least I know what I've been doing. I've had my job to do, and I've done it. But you're nowhere, Blue. You've been lost from the first day.(230)

ブラックには初めからブルーが必要だった。書き手・作者・小説家は自分が何をしていることになっているか、彼自身が忘れないために、四六時中彼を見張る者が必要である。書いている間はそれ以外のことを行なう実生活とは異なり実体がなく、そのため自分の実体を確保しておかねばならない。実体、中心、定点と言い得るものが必要なのだ。したがって、それらであるブルーはブラックにとっては全世界である。そして、死すべき運命である人間にとっては唯一不変のもの—死—にブルーは仕立て上げられる。実体は初めから死であったというアイロニーがあった。またブルーはブラックの企みで彼自身の実体的存在もアイデンティティも失うから、自分自身の幽霊となる。ブルーもブラックも幽霊なのだ。

こうして自分の実体・生を確保したつもりで、ブラックは語ろうとする。彼の虚像であり死であるブルーがいるから、自分は実像であり生であり、書き続けることが可能である。ブラックの書く行為は二人のこの二元論のバランスの上で成り立つ。さまざまな文人の幽霊や書くことに強迫観念を抱くブラックは、語り手である自分の情熱をはるかに凌ぐ書くことの苦難を語ろうとする。ブルーに報告書を書かせ、それを基に自分が主人公である人生の物語を構築しようとするのだ。一方、ブルーと対面すればブラックは物書きである自身のことを意識的に仄めかして彼の反応を見たりするから、報告書とはいえ書くことが仕事の一部であったブルーにとっては、彼との会話が書き手としての良い教育となる。書くこと、作者、読者、言葉について考えざるをえないからである。その結果、ジェンダー的価値観の転換や語ることとその言葉についての理解の変化を通して、ブルーは新たに物語テクストの語り手に作り変えられる。ブラックが自分のしていることや考えを仄めかすことによって行われるこの教育は、主として直接対峙の際に二人の間に交わされる対話と、ブルーの秘かな積極的行動による。一年以上も彼を見張らせて報告書を書かせた後に行われるから、十分書くことや報告書と物語言

説の違いについての内省も可能なはずだ。かくしてブルーが単なる報告書の書き手から物語の語り手となる機は熟していく。ブラックの饒舌な話しぶりに自分の立場や焦りを考えて怒りを覚える時もあるが、ブルーはカウンセリングされているかのように、彼との対話を通して書くことについてのさまざまな問題を考えていく。

最初の直接対峙で、扮装はお手のものである私立探偵のブルーは浮浪者 Jimmy Rose に扮して金を無心し、自分が浮浪者以外の何者でもないと信用・油断させた上で、翌日再びブラックに近づく。するとブラックは本格的に文学の営為について話をし始める。ソローがホイットマン訪問時に見た、たっぷり中身の詰まったおまるが示唆するように、「作品をよりよく理解するには作家の内部に入り込まねばならないというが、いざその内部を目のあたりにすると大したものは何もない。」(208) そしてホーソーンに言及した後で「書くというのは孤独な作業だ。それは生活を覆いつくしてしまう。ある意味で作家には自分の人生がないとも言える。そこにいる時でも、本当はそこにいない。」(209) と語り、心情を吐露するのだ。

次に二人が話す機会は翌日の夜で、ブルーはブラックの跡をつけてAlgonquin Hotelのバーへ行き、同席して話しかける。保険外交員 Snow と名のり、職業が話題になったことをきっかけにブラックはブルーに今の自分の奇妙な状況を解説する。ブラックが語る苦難はブルーのものと全く同じである。ブルーは書き手である彼の実体であるから当然だ。ブラックによれば、彼は私立探偵であり、今係わっている仕事は重要人物でも何でもないある人物を見張り、週一回報告書を書き送ることだが、一年以上その男は何もせず机の前に座ってものを書くだけで、気が変になってしまうくらいだ。さんざん油断させておいてそのうち一気に行動に出ることは絶対ない、何も起こらないことは直感でわかる。探偵稼業から足を洗いたいとも思う。ずいぶん見張ってきたから今ではわざわざ見張る必要もない。自分についてより、やつについての方が詳しいくらいだ。やつのことを思い浮かべるだけで、やつが今どこで何をしているか、たちどころにわかる。やつの何から何までわかる。目を閉じていても見張っていられる。きっとやつは自分のことを、自分の人生の物語を書いているに違いない。(213-5) ここで初めてブラックの感情が露呈したことが声でわかる。ごくわずかだが言葉もつかえ、彼はブルーをこれ以上直視できなくなり顔をそむけたまま、うって変わって震え声で続ける。「男は私が見張っていることを知っている。だからこそ意味がある。私が、彼を見ている私の目が必要なのだ。生きている証しとして私を必要としている。」こう言ってブラックは涙する。(215-6) 自分についてより見張っている相手についての方が詳しくなるということは、見張る・見張られるという二元論で優位な立場が逆転して、自分を失い、その意味で「幽霊」になっていくことを意味する。ブラックにとって、見られているということは消極的な立場なのではなく、積極的に自分が生きていることを保証するのだ。物書き・物語の語り手は書くことに自分を剥奪され空虚（うつろ）な存在となってしまう。この暴力に抵抗するためにブラックは自分の代役を立てて自身を安全地帯に置いた。ブラックの感情が露呈して彼が涙するように、彼は書くこと自体に内在する暴力に翻弄されているのだ。

翌日昼近く、三回目の対話のためにブルーはブラシのセールスマンに化けてブラックのアパートへ行く。部屋を見ると、壁に絵画が一ないし二枚掛かっているだろうという想像は外れたが、あとは思ったとおりの禁欲的な、修道士の独房のような部屋である。「物を書いていらっしゃるようですね」と水を向けるとブラックは話に乗ってきて「何年も取り組んでいる。大作だ。完成に近づきつつあるが、どこまでたどり着いたか、自分でもよくわからなくなることがある。もうほとんど完成だと思った瞬間、大事なことを書き落としていることに気がつき、初めからやり直す。その繰り返しだ。」(220) 完璧な作品はあり得ない。あらゆる文学作品はあるべきものの一つの不完全なヴァージョンにすぎない。常にそれへの途上にあるのだ。書くことの情熱にもかかわらず書くことが常に終わりのない労苦、いや、責め苦と言ってもよいものであることが示唆される。

その三日後の晩、ブラックがアパートを出るのを確認して、ブルーは彼のアパートに押し入る。パニックになって気を失ってしまうが、そこにあった紙束を盗んで逃げ帰る。読んでみると、それが自分の書き送った報告書なので当惑する。このことや探偵としての自信喪失から回復するのに数日かかるが、自分の部屋を見上げるブラックの深い悲しみに沈んだ顔を見て、同情し哀れむ。彼を何とかして助ければ状況も一変するだろうと考える。哀れでこの上なく惨めなのは自分も等しく同じなのだと思い至るが、最後には意を決してブラックの部屋へ行く。少し離れ向かい合って座るよう指示されるが、この時ブラックはかつて郵便局でホワイトを待ち伏せした時にブルーが見たのと同じ仮面をかぶっており、銃口をブルーに向ける。そしてブラックは言う：「君が私にとってぴったりの男だということは、最初からわかっていた。しかしもう君は必要でない。やるべきことはやってしまって、何もすることは残っていない。私はまともすぎ、まともすぎるから考えすぎる。考えすぎるから自分を使い果たす。もう何も残ってはいない。」(229) ブラックはまともすぎ、つまり所与の文学的制度や価値観や二元論言説の枠組みの中で忠実にひたすら書いてきたが—だから所与の価値観で評価される小説家に取り憑かれ、彼らの生活ぶりや人生に興味があった—それが度を越して、消耗したのである。ロゴス起源の価値観が彼を追いつめた。その結果、今ではブラックの何のかけらも残ってはいない。そこで彼が下した結論は、自分と、自分であるように仕立てて自分自身になったブルーの存在を同時に消すことである。そもそもの始まりである見張る・見張られるの二元論に戻り、二元論を成立させる二要素であるブラックとブルーを同時に抹消し、二元論自体を無化し、すべてを御破算にすれば、書くことの苦しみからも解放される。自殺の遺書は準備した。ブラックとブルーが同時に死ななければならない。

作家は物語を書こうとすればここにいてもいないという意味で幽霊であるとブラックがブルーに嘆じたように、ブラックは幽霊である。ブルーに郵便局で待ち伏せられた時と同じ仮面を、この時も彼はかぶっている。仮面はブラック／ホワイトが誰でもない人であること（White=Black=Nobody）を示唆する。ブラックはこの意味でも幽霊である。幽霊ブラックはブルーに自分を見張らせて、その結果彼を幽霊にして、書き手としての自分の人生物語を書こうと試みた。しかしこのテクスト自体も彼

の人生物語自体の一つのヴァージョンにすぎず、彼の人生物語自体が語る物語ではないという意味でも、書き終えられない幻であるという意味でも、そしてブラックに取り憑いて彼に書かせようとしたという意味でも「幽霊」である。ブラックもブルーもテクストも、幽霊なのだ。幽霊［White/ Black］が幽霊［Blue］を幽霊［text］のために作り出したのである。しかもいたるところに幽霊がいてそれらは取り憑くのではなく、取り憑かれている。英語で表現すれば The invention of the ghost, by the ghost, for the ghost. Ghosts, ghosts, everywhere, but no ghost to haunt—all are haunted. となるだろうが、この英語言説自体、過去の有名な言説のパロディであり、「幽霊」に取り憑かれていることを示す。書くことの宿命であろう。さらに、ブラックの企み自体が茶番劇であることを仮面は示唆している。仮面は子供たちがハロウィーンの時にかぶるようなゴム製の恐ろしい形相のもので、額にはいくつも裂け目があり、眼球からは血が滴り流れ、牙をむいている怪物である。恐怖の仮面ではあるが、郵便局でこの仮面を見て人々が笑った(198) ように、喜劇の仮面でもあるからだ。

3．The Invention of Solitude/the Ghosts

ブラックに一年以上も幽霊にされ翻弄された私立探偵のブルーはその過程でいかに変化するのだろうか。これまで彼は仕事をそつなくこなし、依頼の件について書くよう求められる報告書の作成に困難を感じたことはなかった。彼の報告書は明晰で、全体が首尾一貫した内容で、あくまで外面的な証明可能な事実のみが書かれていた。一つひとつの言葉が、それが指し示す事物とぴったり合致するかのように出来事を描写し、彼もそれ以上深く考えなかった。彼にとって言葉は透明で世界を映し出す窓であり、そもそも窓があることすら意識していなかった。(174)言葉は自明のもので、言葉について考えることさえなかったのである。しかしブラックを見張ることになると孤独であるし、彼がほとんど何もしないので報告書を書くことも今までのようにはいかない。これまで通りの書き方で丹念に一つひとつ極めて精確に細部を書くのだが、何時間もかけて書いた報告書に彼は不満で、不安でもある。そして何が起こったかを書いたところで、本当に何が起きたかは伝わらない、言葉が役に立つとは限らない、むしろ事物や事実を見えにくくしてしまうこともあるのだと思い知る。(175-6)それでも尾行しながら何か一貫したパターンが現れるのを、ブラックの秘密につながり推論を可能にする手がかりを、ブルーは辛抱強く待つ。すると、変化の兆しは徐々に現われる。これまでは報告書ばかり書いてきたが、今は空想でブラックの一件についての物語をいくつも作りあげる楽しみをブルーは知る。ただしそれらはそれぞれ首尾一貫した物語であるし、彼は真実の物語が何なのかを何よりも知りたい。破局するまでの恋人との関係については、男は女より有利な立場にいなければならないから女に弱みを見せてはならないと思う。

このように首尾一貫性、精確、論理的合理化、真実探求、女に弱みを見せないなど所与の父権制的価値観と言説が特徴であるブルーだが、ブラックの人生に深くかかわるようになると、彼と同化していくようになると同時に、価値観や言語も変化していく。道の向こうのブラックを見張っていると、

ブルーは鏡の中の自分を見ているような気がする。見張っていた初期の頃、時折自分と彼が完璧に調和しているように、ごく自然に一体化しているように思えるので、彼の行動が正確に予測できるまでになる。(186)こうしてブルーはブラックになっていく。このことは彼がブラックの苦悩を引き受けねばならなくなることをも意味する。かくしてブラックが作家には自分の人生がなくなると考えたように、探偵のブルーはブラックを四六時中監視しながらかつ何もしないという状態に置かれて、彼にとっての生活というものがほとんどなくなり、探偵ではなく語り手になっていくのである。それでは書き手としていかなる物語を、あるいはいかにブルーは語るのだろうか。そして書くとはどういうことで、書き手はどうあるべきだと知るようになるのだろうか。

ブルーが語り手になるまでにはさまざまな変化が現れる。まず、世界や事物に対する理解が変わる。これまで彼はあるがままの世界に、何らかの楽しみを常に見いだしてきた。事物がそこにあるということ以上のものを世界に求めたりはしなかった。事物は疑いなくそこにあり、完璧にそれ自体であり、それ以外の何ものでもなかった。(171)ところがこの事物の事物性というものも疑わしくなり、彼は不安になる。また、認識の変化が挙げられる。探偵の仕事でこれまで何もせずじっとしていることなど皆無であったが、人生のスピードが急激に遅くなったため、これまで気づきもしなかった事がらに気がつくようになる。毎日部屋の中を通過していく光の軌跡や、ある時間に決まって太陽が天井に映す雪のイメージが見え、心臓の鼓動や呼吸音やまばたきなど小さな音や現象をはっきり意識する。(172)さらに、読む術についても洞察を得ることになる。私立探偵であるブルーは根っからの楽天家で、行動の人であり、これまで新聞や雑誌を別にすればほとんど読書というものをしたことがなかった。ブラックがほとんど何もせず『ウオールデン』を読んでいるだけなので、自分も読んでみる。元来難解な本なので彼も思うように理解できないが、ほどなく読むこつはゆっくり読むことであり、書かれた時と同じ慎重さと冷静さで読むことであることがわかる。(194)そして最も重要な変化は、今まで自分の内部にある世界など考えたこともなかった彼が、ブラックの一件を機に初めて内省したり、手持ち無沙汰で今まで扱った事件について回想するようになることである。自分の人生物語の一部をなぞり、語りはじめるのである。語りのレッスン、試行錯誤が始まる。

ブラックが初めて感情を露にして、ブルーに「男は私が見張っていることを知っている。だからこそ意味がある。自分が、彼を見ている私の目が必要、生きている証しとして私が必要なのだ。」と言って涙した(215-6) 時、ブラックを見張る仕事を開始してから初めて、ブルーは事態が新たな局面を迎えたことを知るが、悲しいと思う。体から生気を抜き取られたような思いがする。世界に失望してなぜか今回に限って、事実に落胆する。ブラックの窮状や感情が彼自身のものになっているからである。そして仕事を依頼した、哀れな、打ちひしがれた、誰でもない男ホワイト／ブラックのことを考え、眠気に心地よく包まれるうちに、世界のあらゆるものに色があることの不思議に心打たれる。世界を異なる視点から眺めると、もの自体の存在感やそのすばらしい多様さと不思議さに気がついて、頭の中で青い物たち、白い物たち、黒い物たちを順に列挙する。(217)二回目の語りのレッスンである。『幽

霊たち』は「初めにブルーがいる。次にホワイトがいて、ブラックがいて、そもそもの始まりの前にはブラウンがいる。」(161) という一文で始まる。ブルーが青、白、黒の順にリストを作るのは、自分から始まって自分と関係が深い人の名前を連想したからだろうが、登場人物の順に無意識的に物語の要素を列挙していることを考えれば、『幽霊たち』の物語を無意識的に再現・再生産していることを示唆する。ただし彼は語り手として断片的に『世界』と『幽霊たち』というタイトルの物語を語っているだけである。この時の言説は英語の原文では There is....と There are.... だけの構文で語られる。このことが示すように、彼の語りは物のイメージの羅列にすぎなく、相互の関連性もなく、文章にもなっていない。ブルーが「ゲームにも飽き、きりがないと呟きながらうとうとし始める」(218) ように、この彼の語りは遊びの域を出ないナイーヴなもので、洗練されたものとは言えない。

ブラックとの会話によって書くことの情熱と責め苦を知らされてから三日後、ブラックが外出したのを見計らって、大胆にもブルーは彼のアパートに押し入る。ここでけりをつけなければ永久にこのように中途半端なままだと思ったからである。泥沼とも言えるこの一件から自由になれるかもしれないと思うと幸福であったが、恐怖に圧倒されて体はうち震え、嘔吐感もする。彼の部屋に一歩足を踏み入れたとたんブルーの「中のあらゆるものが闇と化す。まるで毛穴を通して夜そのものが彼の内部に押し入ってきて、とてつもない重さをたたえて頭の上にどっかり坐り込んだかのように感じる。同時に自分の頭が膨張していき、空気をいっぱいに吸って肥大した頭が今や肉体から離れて漂い去ろうとしているかのようである。」(223) もう一歩ブラックの部屋に足を踏み入れたとたん、ブルーは気を失う。探偵ともあろう者が状況に振り回されて冷静な判断や沈着な行動をとれずに気絶して逃げ帰ったことにこの上なく落胆し、自分は失敗者であり臆病者なのだと実感すると、ショックである。しかしこのことは女に対しては男らしく振る舞い弱みを見せず、すべてに関して論理的に思考し大胆で緻密な行動を取るべきというような典型的な父権制の価値観に支配されていたかつてのブルーとは異なるブルーになりつつあることを示す。この変化の徴候は「彼の頭の中と外部の闇が裏返る。同時に、空気をいっぱい吸って膨張した頭が体から離脱する」というように、二元論言説自体の構造変化と身体の変化によって示唆される。二要素の裏返しと切断で表現されるのだ。ブラックの外出は自分が何らかの行動に出ることを期待するあからさまな合図だ、何かの罠だとブルーには解っていたが、確かにブラックは事態とブルーに大きな転換点を用意した。彼はブルーを予想もしなかったように変える。

ブラシのセールスマンに変装してブラックのアパートへ行き、ブルーは彼の仕事部屋を見る。部屋に絵画が一枚か二枚掛かっているだろうという予想ははずれたが、その他は思ったとおりの禁欲的な「修道士の独房」のような部屋であったことを思い出そう。一方の隅にきちんと整えられた小さなベッド、別の隅に簡易キッチンがあり、すべてはしみ一つなく、パン屑一つ落ちていない。そして部屋の真ん中に木製の机と椅子。鉛筆とペンが数本ずつ、タイプライター、洋服箪笥、ナイトテーブル、電気スタンド、本棚とほんの少しの本。電話、ラジオ、雑誌はなし。目を引くのがテーブルの端に置か

れきちんと耳を揃えた紙の山のいくつかである。書かれたものもあれば、まだ書かれていない紙もあり、前者にはタイプされたものと手書きのものがある。全部で数百ページ、ひょっとしたら数千ページもあるだろう。そしてブルーは思う：「こんなのは人生／生活とは呼べない。何とも呼べない。これじゃ無人地帯だ。世界の果てで行き着くところだ。」(219-20)紙と筆記用具とタイプライター。他は生活するのに必要最低限の設備と物。すべてはしみ一つなく、無駄なく、清潔で、整然としているが、人の住まいとか生活とは言い難い生活ぶりである。ブラックはブルーという幽霊を作り自分の実体性を確保しようとした。ところがブルーの目には彼が生活環境の中でいきいきと生きている人間とは思えない。むしろ自ら自虐的に生を剥奪しているように思える。また、きちんと順番になっている盗んできた自分の報告書を読んで、ブルーは「その黒と白の織りなす世界は何一つ意味することなく、何も語っていず、沈黙と同じくらい真相からはるか隔たっている。」(224) と思う。黒のインクと白の余白、つまりブラックとホワイトの作り出す言語世界がそうであることを示唆する。この意味も伝えることもない、命のない言説から、ブラックはテクストの命を紡ごうとした—あるいはそれ自体をテクストにしようとした—が、本当に起こった出来事、そして描こうとしたブラックの人生からは程遠い。彼の戦略の不毛さをブルーは知っている。

自分の報告書が何のために使われたのかまったくわけが解らなかったが、事態が多少のみ込めて回復するまでに数日要した。その間、この一件に取りかかって以来壁に張りつけてきた自分の人生のさまざまなエピソードを記録した写真を、ブルーは一枚ずつ順番にじっくり見つめ、じっくり考える。このささやかな写真館を一巡する度に、かつて未来のブルー夫人になるはずだった元恋人の写真があるものと想像する。ブルーはロマンチストであり、ブラックのような硬直さはない。このようにブルーは写真が語る言葉を聞きながら自分の人生の物語を無言で何度も語る。語りの第三回レッスン。写真は練習曲の楽譜と言ってよい。そしてブルーが語り手としての完成に近づくのは、部屋を片付け身辺を整理し、あたかも新生のための「沐浴」の儀式であるかのように身を清め、真新しい服を着て、ブラックの部屋へ乗り込んだ後である。はじめは彼を救いたい一心であったが、銃で二人とも死のうとしたブラックを、ブルーはしたたか打ちのめして部屋を去る。ブラックの物語のシナリオでは彼が銃で自殺して、かたわらにブルーの死体もあって物語が終わるはずであった。ブラックはブルーが来るのを待っていた。自分の人生物語の結末を書くのは自分ではなく、報告書の形でそれを書いてきたブルーでなければならないからだ。ブラック自身も彼の物語自体も不毛であったが、語り手としての彼の人生を語る物語を作成し語る・書く主導権はずっとブラックに握られていた。しかしまともすぎるから考えすぎ、考えすぎるから自分を使い果たして、何も残っていなくなってしまった彼は、所与の文学制度と言語が彼に加える無形の暴力に屈したと言える。一方、ブルーはここでブラックに実際の物理的な有形の暴力と物語の異なる結末で対抗した。そしてひいてはブラックの強迫観念であった所与の文学制度と言語に打ち勝ったのである。持ち帰った彼の物語原稿をすべて読み終えた後、ブルーは一人で部屋から外に出ていき、その後の消息は知れない。物語(text)の主人公・語り手・物語自体

となって消えたのである。幽霊ブルーが幽霊であるテクストを発明・生産する。(The invention of the ghosts. Blue[=text] invents the text.) この時ブルーはテクスト自体であるから、主格と目的格は同一である。この統語法に内在する規範に対する攪乱が示唆するように、無形の暴力には有形の暴力で、頭には身体で、そしてテクストの異なるありようで対抗して、ブルーは所与の文学制度と言語に勝利したのである。ブラックをひたすら見張るだけで空想を働かせて物語を作っていたころの孤独も、ブルーが物語自体となった時に雲散霧消したと言える。

4．And There Is None

一年以上にわたるブラックとブルーの闘争の結果、前者はおそらくブルーに打ちのめされて死に、後者はテクスト自体となって消えた。『幽霊たち』は書くことに内在する暴力・抑圧に二人の書き手がどう交戦したかを描いている。所与の制度、書くこと自体、そして彼の強迫観念である二元論自体に内在する原暴力にブラックは翻弄され、この野蛮の前では彼の戦略は無力であった。ブルーはそれに対し実暴力で対抗し勝利した。自身二元論的なブラック・ホワイトの原暴力（無形の黒い暴力・抑圧）にブルーの物理的な有形の暴力行使が、頭には身体が、勝利したのだ。そして原暴力には二元論を越えた対処法、つまりテクストになることが有効だった。それではブラックとブルーが書くテクストの違いは何であろうか。

幽霊の世界は何色だろうかと問われれば、普通は白と黒とその中間にある様々な色と答えるだろう。墨絵を連想するかもしれない。少なくとも原色とか極彩色とは言わないまでも、豊かな色の世界では決してなかろう。『幽霊たち』の主要な登場人物たちの名前は色から採られている。 Blue, White, Black しかり。またマイナーな Brown, Gold, Red, Violet, Jimmy Rose, Snow などの人物も色と関連している。このことは単なる作家の気まぐれであろうか。色はこの小説において何らかの意義があるのかをまず考えたい。ブラックとブルーのテクストを色で例えれば何色であろうか。そしてなぜ主人公の名が「青」なのか。

レオナルド・ダ・ヴィンチが完成させたスフマートは輪郭線をくっきり描かず、物の形が陰の中へ消えていくように、多少ぼんやりと描く手法である。ぼんやりとした輪郭とやわらかい色彩によって形と形が溶けあい、常になにかしら見る人に想像の余地を残す。(天野　他訳 303) 墨絵は東洋的なその変種と考えてよかろう。文学作品もこうあるべきではなかろうか。厳密で剛直・硬直して読者の想像力を喚起させないようなものであってはならない。しかし白でありかつ黒である語り手 Black/White が描くであろうテクストは、墨絵というよりは独立し互いに排除しあう白と黒のコントラストによる絵を示唆するし、連想もする。彼は二分法の外に出れないからである。白と黒の緊張感が何らかの審美的効果を産みだすだろうが、このような絵にスフマートや墨絵のもつ効果は望めないから、文学のテクストとしては適当ではなかろう。それではテクスト／語り手となった主人公はなぜ「青」と名づけられ、彼のテクストはあえて言えば何色であろうか。英語の blue の意味の一つであ

る憂鬱が彼の気分を表していたこともあろうし、青がすべての色相の元になる三色（赤・黄・青）の一つであり、したがって語り手の原型的人物として想定されたことも理由の一つであろう。しかしさらに青のイメージ・シンボルを考慮する必要がある。

柏木は文化史的にヨーロッパにおける青の意味を論じ[2]、以下のようにまとめている。

> 青を特徴づけているものは、いわば象徴性の弱さである。基本的な色彩であるにもかかわらず、価値としては中間色以上に中間的であり、本質的に象徴化と記号化を拒む。今日多くの人びとが青への好みを示すのは、実はもっとも「無難」な色であり、中立的な色であるからかもしれない。そして同時にある特定の意味作用への無意識的な反抗であるのかもしれない。国と国との連合や平和という観念と青がある意味で調和するのは、こうした青の消極性と妥協的性質によるところが大きい。したがってこの感性は、ピカソの「青の時代」やイヴ・クラインの実験的な青への挑戦とは、はるかに次元を異にするものであるようにみえるのだが、それでもこうした激しい芸術作品にある種の心地よさを感じるとすれば、それはわれわれの心の深層に根源的な青へのノスタルジーが宿っていることのあかしであろう。(107-8)

ヨーロッパにおける青の文化史であるからアメリカの文化には該当しないかもしれないが、アメリカの文化の底流に西欧文化があることを考えれば、アメリカ文化や小説を考える上でも青が本質的に象徴化と記号化を拒み、特定の意味作用への無意識な反抗・妥協的性質を持つというのは示唆に富む。青は青、あるがままに青なのである。しかも青が多少の色調の相違はあるものの労働者の服の色と同時に高貴な階級の人々の衣装の色として、対照的なイメージを同時に内包していたという点では二元論言説を越えるものであると言える。さらにその二元論に加えて神聖な色としてのイメージも共存していたことはその遍在性と多元的な存在感を印象づける。また「駆け足で」青の歴史を概観する小林も、青は「少なくとも、人間の魂の根源的な欲望である超越的なものにかかわる色」であると述べている。(199)象徴化・記号化・特定の意味作用への抵抗、あるがまま、もの自体の表象、所与の二元論言説や書くことにまつわる制度からの超越などの含意を考えると、青はブラックの二元論を突破することができた『幽霊たち』の主人公ブルーにふさわしい名前だったといえる。

所与の二元論の枠組みと文学制度と言説の中で書こうと思えば、作家は多大な犠牲を払わねばならない。書くことは孤独な作業で、生活を覆いつくしてしまい、自身の人生がないとも言える。この意味で作家は「幽霊」である。ブラックのように、まとも過ぎると書き手は考えすぎ、考えすぎると自分を使い果たし、何も残らなくなる。そこで自分の書くことの情熱と受難の人生を書くために、ブラックは見る・見られるの二元論の役回りをブルーと取り替えて、自身を見る主体ではなく見られる客体とすることで自身の実体・実生活・生、換言すれば主体・中心・定点を確保しようとした。しかも、見ているブルーをブラックが見て／知っているから彼の立場はなお一層強化されるはずだった。しかしそれでも、いや、それだからこそ彼は書き手として自分を使いつくしてしまい、自らと自分の複製として作ったブルーをもろとも消すことを決断する。ところが、ブラックから書くことの困難や代償

を聞かされ、私立探偵として事実の断片を報告するだけの語り手から物語言説を紡ぐ語り手として成長しつつあるブルーは、ブラックを殴り殺し、彼の背後にあり彼に取り憑いていた書くことに内在する暴力や所与の二元論言説や価値観をもろともねじ伏せた。それらに対抗するにはまったく新しい戦略が必要なのだ。ブラックの書く人生物語を読み終わり、ブルーは部屋を出て世界のどことも知れぬところに消える。どこでもないところはどこでもあるところである。自身テクストとなって世界に消えたブルーはテクスト自体であるから、書き手と書かれるテクスト—主体と客体—という二元論はここには存在しない。かくして『幽霊たち』の結末では主要な登場人物たちが一見いなくなってしまったが、テクスト・世界となった書き手・ブルーは世界に遍在して、『世界』という物語・書物を新たに語り・書き始める。ブラックが書こうとした書くことの情熱(passion)と受難についての黒と白—黒いインクと白い余白—のみのテクストとは違い、ブルーがこれから書くテクストは所与の二元論言説や価値観を超越・突破した、青を基調とする風景画であり、様々な色が満ちあふれる不思議の世界なのである。

註

1．Springerはブラックがノートに書いていることに言及して、『幽霊たち』の重要な鍵となるサブテクストとして *Walden*, "Wakefield," そしてドッペルゲンガーとして窓・鏡に映る像が強迫観念となっている点で共通点がある"Monsieur du Miroir" を挙げている。(29)小説『幽霊』全体を見ても『ウォールデン』の意義は重要であろう。

2．青の歴史を以下のように概説している。黒・白・赤が支配的な色であった古代から中世にかけては、青は背景的な色にすぎず、肯定的にとらえられることはなく、不吉さ、死・喪、醜悪、子供と結びつけられる。中世、農民は色あせて灰色がかった青を着たが、鮮明で混じりけない青は貴族階級に好まれ、聖母マリアと結びつけられる神聖な色となり、次いで「国王色」ともなる。宗教改革時の青は地味であるがゆえに黒、白、灰色の無彩色に次いで「誠実な色」であり、節制に通じる色であり、天と精神を連想させる色であった。青の民主化が進む18世紀は、一方では夢想やロマン的感傷を喚起するものとしてロマン主義運動と結びつき、他方では民衆の制服や労働着の色であった。市民社会の誕生後、青は黒のヴァリエーションとしてマリンブルーが日常生活に溶け込んでいく。(「青のヨーロッパ—その軌跡を追って」69-109　参考)

引証文献

Auster, Paul. *The New York Trilogy.* New York: Penguin, 1990. なお、柴田元幸　訳『幽霊たち』(東京：新潮社、1995) を参考にさせていただいた。

大橋健三郎　他編。『総説アメリカ文学史』。東京：研究社、1975。

柏木　治。「青のヨーロッパ—その軌跡を追って」。浜本隆志・伊藤誠宏　編。『色彩の魔力—文化史・美学・心理学的アプローチ』。東京：明石書店、2005。

木下　卓　他編。『英語文学事典』。京都：ミネルヴァ書房、2007。

小林康夫。『青の美術史』。東京：平凡社、2003。

Gombrich, E. H.　天野衛　他訳。『美術の物語』第16版。東京：ファイドン、2007。

Springer, Carsten. *A Paul Auster Sourcebook.* Frankfurt : Peter Lang, 2001.